





「オレを見てみる。どうかにかこうにか大学は  
 出たものの、千葉県チバケンの、それも駅エキから徒歩トボ  
 分のマンションはマンション年ネンローンローン。働けど働けど、  
 暮らしは楽にならず。休みの日に家でごろご  
 ろろんでいると、嫁ヨメに決まって文句モンクを言われる。  
 こんなオレオレが自殺ジコウしようなんて考えたことな  
 いんだぞ」  
 今日の父は、なんだかいつもと違う。  
 「でも、先生が自殺ジコウをしたのって、Kを裏切  
 って、そのKKが自殺ジコウをした自責ジセキの念ネンにかられ  
 ていたからじゃないの？」  
 「そのKKだって自殺ジコウする理由リユウはない」  
 きっぱりと言イい放ハった。  
 「どうして？」  
 「KKは東大トウダイ在学ザイガクのエリートエリートだろ？ 言イい寄ヨっ  
 てくる女メ、いっばいいるだろ？ 合アコンコンのセ  
 ッテイテイングングにも苦勞クノウしたオレの ●●●●大学ダイガクOBOB  
 じゃないんだから」  
 「それもそうだね」  
 「少しは否定ヘイテイしろよ。それに、先生センセイだって、

すでにKとつきあっていたお嬢さんを略奪し  
 たわけじゃないだろ？先生もKとお嬢さん  
 はつきあっていないかった、どちらも片思いだ  
 った。そこに先生が先に『お嬢さんをくださ  
 い』と言ったから、お母さんが結婚を許して  
 くれた。それのどこに問題がある？」  
 「問題はないけど……」  
 いけない、父の理屈に言い負かされそうな  
 雰囲気だ。  
 「先生が悪いとしたら、それはKを下宿に誘  
 ったことだな。誘いに乗ったKも同罪だ」  
 「どうして？」  
 「おまえは高校二年生にもなっでそんなこと  
 も分からないのか？一つ屋根の下に二人の  
 男と一人の女が一緒に暮らせばどうなる？  
 しかも美人だぞ。一波乱、二波乱起こって当  
 たり前じゃないか」  
 「それは何となく分かる」  
 「だろ？先生もKも勉強ばかりしていたか  
 ら、男女の機微に疎かった。だから悲劇を招

いてしまったんだ。勉強ばかりしていれ  
 いてしまったんだ。勉強ばかりしてい  
 いたってものじゃないんだ。その点。オレはだ  
 な：：「  
 と言いかけたところに  
 「何、二人で話しているの？ 夕ご飯できた  
 わよ」  
 と、母が入ってきた。  
 父はせき払いを一つすると、  
 「なんだな、読書感想文なんて、分からなけ  
 れば分からない、そう書けばいいんだ」  
 「でも、夏休みの宿題だよ？」  
 「あのな、『こころ』なんてものは、偉い国  
 語の学者が、人生を賭けて研究するに値する  
 小説なんだ。それを、十七年しか生きていな  
 いおまえが、一度や二度読んだくらいで、理  
 解できるはずないだろ？ そういうのを図々  
 しいにもほどがあるって言うんだ」  
 「それはそうだけど：：」  
 「分からなければ分からないでいい。来年、  
 そして再来年、また読み返したときに、今年

読んだときには気づかなかったことに気がつ  
 けばいいんだ。今年感じることでできなかった  
 たことを、来年感じられるようになればいい  
 それが成長というものだ  
 そう言うところ  
 「夕ご飯、さめないうちに食べようか」  
 と、満足そうにわたしの部屋から出て行った。  
 父の話にはむちゃくちゃなところがある。  
 だが、根拠はないが、その前向きさは嫌いでは  
 ない。そして、分からないことは分からない  
 いと素直に認める、その態度はなんだかすて  
 きに思える。なかなかできないことである。  
 高校二年生の夏が終わった。「こころ」に  
 対する自分の答えは見つからなかった。理解  
 もできなかった。それが今のわたしの実力な  
 のだと認めざるを得ない。  
 だが、来年、そして再来年、もう一度「こ  
 ころ」を読み返してみたい。そのとき、自分  
 は『こころ』から何を感じ取れるようになって  
 いるだろうか。